水上勉全集

21

水上勉全集　第二十一巻

昭和五十三年七月十五日印刷
昭和五十三年七月二十五日発行

著　者　水上　勉
発行者　高梨　茂
印刷者　白井倉之助
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ八ノ七
電話(五六一)五九二一
振替東京二―三四
検印廃止
©一九七八

目次

「禅の道」紀行 3
越前戦国紀行 101
義貞記 193
越前一乗谷地蔵私考 231
丹後路 245
枯木の周辺 297
一会の人々 359
わが華燭 511
池大雅 529

太白 543
若狭幻想 563
あとがき 687

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

「禅の道」紀行

目次

一章　祖師たちの道　5
二章　一休の道　19
三章　愚堂・大愚・無難の道　32
四章　飯山正受庵への道　46
五章　白隠の道　54
六章　盤珪・正三の道　67
七章　良寛の道　83

一章　祖師たちの道

「サテモ〳〵コノ世ノカハリノ継目ニムマレアイテ、世ノ中ノ目ノマヘニカハリヌル事ヲ、カクケザ〳〵トミ侍コトコソ、ヨニアハレニモアサマシクモヲボユレ」

とは、今の世を「道理トイフモノハナキ」と嘆じた慈円のことばである。中世の地獄がいかに深刻でおそろしいものであったかは、『方丈記』や『徒然草』をみればわかる。山法師のあらくれる寺を捨て、市井の草庵にかくれて、あるいは遊行の生活に沈潜していった「聖」たちが、慈円のいわゆる、「法の火を君かかげずばいかにせんわがたつ杣の暮れがたの空」のこころで、末世の故にこそ仏法は守られねばならぬと、新しい宗教をさぐろうとしていた時、同じように叡山を降り、中国へ渡った明庵栄西と永平道元が、達磨を始祖とする臨済禅と曹洞禅を伝来したのは建久二年（一一九一）と安貞元年（一二二七）である。この禅宗も、戦乱のしずまらぬ日本で、二十四流といわれる流派に分かれて伝播されるけれども、宋の官寺制度下にあった「禅」が、日本にきて、同じ形態の、武家、朝廷の帰依保護がなくては存立し得るはずもなかった。「純粋禅」とは、宋代以前の、つまり始祖達磨から六祖慧能、神秀に至るまでの、すなわち「唐禅」の自由奔

放な姿を指すことは当然であろうが、日本に伝来された禅宗は、武家、朝廷の援護で発展しながら、唐禅の魂をわすれず頑固にその修法を守ろうとする禅者も育てたかわりに、また、権力に迎合して修法をわすれる禅者も育てたことは史家の説くところである。

率直にいって、日本禅の源流は、臨済宗は応・燈・関とよばれる、大応、大燈、関山の系譜に、曹洞宗は道元派に属する。栄西が伝来したところの臨済禅は、建仁寺の創立、帰化僧無学祖元の円覚寺創立で、北条氏、朝廷と結んで宋禅思想を大いに普及させるが、祖元の法孫夢窓疎石の活躍で、京都五山、十刹が官寺化され、相国寺に僧録司がおかれ、住職の進退にまで幕府の統治がおよぶようになると、五山は日本禅宗の中心になったが、当然、純粋禅の面目を失っていった。初代僧録司は夢窓門下の春屋妙葩。相国寺には鹿苑院、蔭涼軒など将軍の自坊も出来、塔頭は、詩僧の巣で、化粧をなした童行、喝食をはべらせての詩会や連歌会が催されたと史書にみえる。玉村竹二氏『五山文学』によれば、禅僧たちは風流文雅に流れ、幕府の葬式法要の使徒と化した。世をあげて宋風かぶれの時代だから、入宋した禅僧（売僧）たちの作る法語に、武士たちは新知識としての興味をもち、坐禅参禅より、法要法語愛好家となる始末。中国貿易で、経済人としての禅僧の役割も目立ち、商人の帰依もふえて、禅僧は京、堺を往還、茶会、詩会の中心人物になって優雅な日々をおくった。絶海中津のように外交文書作成の第一人者もいた。つまりは、今日みられるところの政禅、茶禅、文学禅、美術禅の誕生と、その根づくりが、慈円にいわしむれば「道理というもののない」時代にふかくなしとげられていたわけである。道理というもののなかったあさましい時代であったがゆえに、禅文化なるものがさかえたことをよく吟味しておいても

らいたい。しかし、このような五山禅にあきたらぬ僧はいた。禅本来の面目の欠如を嘆いて、五山叢林に見切りをつけた。行く先はどこであったろう。「林下」とよばれる道場であった。この禅道場がかろうじて日本純粋禅を守りぬいていた。すなわち応・燈・関道場である。

いま、当時の官寺化された五山の風格を偲ぶのに苦労はいらない。鎌倉五山、京都五山のどれかの寺を、市の観光課が手渡してくれるパンフレットで案内されれば足りる。義満が建立した相国寺は政僧詩人絶海中津、義堂周信（ぎどうしゅうしん）の住んだ寺である。今日も、金閣鹿苑寺、銀閣慈照寺を別格地にもつが、武家と結びついて、全国禅僧の進退起居を管理した僧録司所在の面影はある。もっとも、その建物は、応仁の乱で消失後、大名あるいは将軍の力で建てられたものであって、武士の塔所ともいえる塔頭寺院にとりまかれた本山のありようもおもしろい。なかには、大徳寺のように、堺商人が寄進して再建したものもある。またそれも当時の伽藍は焼け、のちのものが多い。したがって、五山十刹の今日を見て、中世の風格を偲ぶというよりは、その権威のありようを偲ぶに足るといえようか。敷地も塔頭も健在のころは、白粉首の童行、喝食が松林の細道を往還し、僧録司にへつらう茶坊主どもが、きらびやかな色衣を着て歩いた回廊は、いまの建物でも想像できる。金閣、銀閣の庭に佇めば、そこが将軍の別荘、隠棲地であったことがわかる。禅僧に化けた武士の住居であった。いつの世も権力者の好む隠棲の地は禅刹である。頂上に武家がいた。それをきらって、祖師たちは鎌倉を捨て、京を捨てて生きようとした。そのはずだということも、豪壮な禅刹を見ておればわかってくる。禅は伽藍や権威にこだわっては成立しない。禅僧は随所作主でなければならない。

大応は南浦紹明という。駿河の人で聖一国師の甥にあたった。正元元年（一二五九）に入宋して虚堂智愚の法をつぎ、文永四年（一二六七）に帰国、筑前太宰府崇福寺に住すること三十余年、嘉元二年（一三〇四）に上洛して亀山上皇に禅を説き、万寿寺に住した。のち北条貞時に招かれて建長寺に移り、延慶元年（一三〇八）十二月二十九日に入寂、後宇多法皇から円通大応国師と諡された。門下に通翁、宗峰、月堂、滅宗らがいたが、なかで宗峰妙超がいちばん秀でていた。すなわち大燈である。

大燈は、播磨揖西の紀氏一族浦上氏を父とし、母はこの地の有力者赤松則村の姉であった。父母は、その出生を播磨の書写山如意輪観音に祈ってあたえられたと言う。弘安五年（一二八二）、元寇の翌年であった。正応四年（一二九一）十歳の時に、書写山円教寺の戒信律師に師事、十五歳の時には経論や律部、仏教史の学に通じ、十七歳で学問の限界を知り、不立文字の禅を求める心があった。二十歳で鎌倉建長寺にゆき、二十三歳で万寿寺で仏国禅師にあい、そこで薙髪した。仏国は夢窓の師であった。だが、大燈は仏国の許を去った。満足しなかったのである。筑前太宰府の大応が万寿寺に上るときいて、すぐ京都へ向かう。有名な大燈の「雲門関字」の公案透過について、柳田聖山氏の名解釈（「日本の仏教」9『臨済の家風』）があるので、少しながいけれどそこを拝借する。

「『雲門関字』の公案というのは、『碧巌録』第八則に見えるもので、唐末の雪峯義存の門下三人の僧の問答に基づき、特にその中の雲門文偃が『関』と答えた一字に工夫を集中するのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

関の真意を知ることは、直ちに禅そのものの体得にほかならぬ。関字とは、『関ということ』であり、字と言っても、もとより関という文字に関係しない。象形から発展した漢語は、それぞれの一字に独自な意味をもち、意味は無限の含蓄につながる。（中略）大燈は、大応より『雲門関字』を与えられたとき、彼は直ちに、『錯を以て錯につく』と答えている。これは『まちがいを重ねる』という意味である。関はもともと正当なものを守るためであるが、すでにものの正当を主張することそのことが、錯に対する分別であり、相対的なものである。道の道とすべきは、常の道でないからである。（中略）しかし、大応は直ちに大燈を許さなかった。彼は、この公案のいっそう深い工夫を命じて、この見込みのある弟子を激励した。やがて、大応が鎌倉の建長寺に移ってまもない頃、ある日、大燈は机の上に鎖子（さし）を放り出そうとして、忽ち関字の真理に気づいたという。鎖子は、関門のくさり、あるいは錠前である。（中略）日常生活の中で、最も大切なものをいとも無造作に机のあたりに放り出して、思わず現実の秘密に気付いたのである。『行状』と『年譜』は、全く同じ文章で、『円融無際、真実諦当、大法現前の処に到り得て、汗流れて背を浹（うる）ほす』と言っている。完全なること限りなく、しかも最も具体的な真理が、眼の前に露出されているのを見て、彼はあまりの怖しさに、全身に汗をかいたのだ。（中略）大燈はこのとき、関字の秘密を彼の全身に知った。彼は直ちに方丈に至り、大応に自己の見解を呈して言った。『幾（ほと）んど路を同じうせんとす』これは、古人と同じ境地に立った者のみのひそかな誇りと喜悦を示す。雲門も師の大応も、同じ関を透り、同じ路をゆく人であったことの驚きである。（中略）大応もまた喜んだ。『昨夜、わたしは夢に雲門大師がわが室に入るのを見た。今日、関字を透った汝は、ま

さしく雲門の再来である』大燈は、大応の賞讃に耳もかさずに引き下った。そして翌日、次の二偈を呈した。『一たび雲門の関を透過してみると、南北東西、どこにも路が通じている。夕に通り朝に遊ぶ路上に、全く主客の別はない、両脚の真底から、すがすがしい風が限りなくまき起る』『雲門の関字を透過してみると、曾ての旧い路というものは無い、青天白日、すべて我が家の庭である。わたしを運ぶ機関と車輪は、限りなく自由に転変して何ものをも寄せつけぬ、あの金色の迦葉尊者すら、ここでは手をこまねいて引き下るばかりだ』大応は大燈のために、直ちにその末尾に印可の語を書きつけた。『汝はもはや完全に真理に合した。わたしは汝に及ばぬ。わたしの仏教は、汝によって大いに世に興るだろう。今後、ひたすらに二十年の長養を経たのち、世に出てわたしのこの証明を発表せよ』」

ながながと、柳田氏の解釈をぬき書きさせてもらったのも、じつは、師が弟子に嗣法する際の、気合いと、「投機の偈」なるものがどのようなものであるかを見てほしかったためにほかならない。大燈の投機の偈はもとより漢文でかかれてある。悟りの境地を直ちに偈に表現したところに大燈の特色があった。禅文学の美しさは、その句の深さである。これは五山内で、文学に流れてこころを表現し得なかった夢窓一門の禅僧たちと対蹠的といえる。

「ひたすらに二十年の長養を経たのち、世に出てこの証明を発表せよ」大応はこの語をのこして延慶元年十二月に建長寺で入寂した。

大応の遺徳を偲びつつ、どこへゆこうかと迷った末、博多の崇福寺へ行って見た。西区に近い

町なかにあった。宋から帰って、三十年住んだこの寺は、もともとは博多に近い太宰府にあったものを、慶長の頃ここに移したというが、純禅道場としての風格のある寺である。町の通りからわずかにひっこみ、二重屋根の山門、門をくぐると両側に、いわゆる門前町といってもよい庶民、商人の店が、参道をはさんで櫛比している。しばらくゆくと境内だが、正面に質素な庫裡と方丈の屋根が見えて、そこは古い土塀にかこまれていた。右手に香煙の絶えない大きな地蔵菩薩像が立っている。そこへゆくのにも石の道がある。巨松が影を落してつつみ、いわゆる京、鎌倉に見る「山」といった感じはなくて、庶民接化の禅刹のおもむきが濃いのだった。虚堂智愚の禅が、根を生やした確かさがこの土からは感じられる。このことはここが、宋より帰ってすぐの都会であったせいか。それとも禅宗を迎える素地がすでにこの地にあったせいか。栄西の開創する聖福寺も同じ市内にあるし、背振山に蒔かれた茶が全国に伝播したように、やはり禅の根をつちかった土壌があったと思われる。崇福寺はつまり、大げさにいえば、純禅の発祥地と見てよいだろう。

大燈が大応に参禅したのは前後五年。京都へ帰った大燈は、五条橋下にゆき、乞食のむれにまじって聖胎長養をはじめる。聖胎長養とは、「母胎にやどった真理の子を健康に育てあげる」ことだと柳田氏はいわれる。

「諸君よ、めいめい自己の心が仏であることを知れ……。もしそのことがわかれば、もうその場その場で、身に服をつけて飯を食い、聖胎を長養して、ありのままに時を過すばかりだ」

『伝燈録』の馬相の章にある、その長養である。ひとたび、自分の心の本質を知ったら、かやす

すきのかげに、石窟の中に、われ鍋でかゆを煮て喰い、二十年、三十年のあいだ、世俗の名利を思わず、財宝を心にかけず、世間をまったく忘れて、岩むろに住し、君主がいくら召しだしても応ぜず、諸侯が請うても地位を受けてはならない、と『伝燈録』はいうが、いずれも唐代純粋禅の真骨頂だろう。大燈はその長養を実践した。

大燈が生まれた播磨の国の書写山へのぼった。ケーブルがあって、山麓からわずかな時間で頂上に達した。円教寺はさらに馬車にのって十数分かかったが、ここは西国第二十七番観音霊場である。禅師の父母が受胎を祈願した如意輪観音は、峻嶮な岩をくだいて、山腹に台地をつくり、おそらく、数年の歳月と、幾千の工人の手を要したろうと偲ばれる丈高い回廊舞台をもつ本堂に安置されている。堂をささえる岩盤のきびしさ、天をつく松柏の巨大さは息をのませ、佇む者を一瞬にして禅境に誘いこむ。弘安五年の生まれといえば、七百年近くも前になる。十歳の少年大燈が、この堂前に佇んで、戒信律師に入門、経論や律部、仏教典を学んだ日々を想像すると、なるほど、ここは学僧の山であった感がふかい。学問や理屈では安心立命は得られぬ。不立文字の禅にひかれる素地は十五歳で宿った。大燈の魂は、幽邃の書写山に屯ろする学僧たちの長い倦怠への反撥だったか。

『国師行状』によると、大燈は鴨川の東岸あたりで、乞食とともに寝食し、日夜、刻苦に励む、とある。乞食大燈の由来である。花園上皇は、大燈の風格に帰依され、五条橋下に使いを送って大徳寺へ迎えようとされるが、なかなか見つからない。一案をもつ者がいた。すなわち、大燈は播磨時代から瓜が好きだったから、これを乞食の群れに見せて、「誰か手のない手で受け取れ」

と命ずれば、必ずや大燈が出てくるだろう。そこで使者は大声で呼ばわった。乞食の群れから声があった。「手なき手でわたせ。受け取ってやろう」大燈であることがわかった。使者はその風格ある乞食に膝ついて上皇の意志をとりついだ。つくり話にしても、おもしろい。やがて花園上皇や後醍醐天皇の帰依をうけ、大徳寺の開山となり、十二月八日に開堂する。すなわち、日本における純粋禅道場の誕生である。五山派をきらった大燈は、法階は一侍者にすぎない。花園上皇は、大燈を夢窓と比較し、「夢窓の問答は宗教味を脱していない。このままでは禅の真面目はほろび、ひいては仏法は滅亡する」と喝破されて、猛烈な修行を主張する大燈の禅風を称揚され、興禅大燈国師と諡されるのである。世にいう正中の宗論は、大燈が法兄通翁の侍者として清涼殿に参内し、南都北嶺代表の玄慧法師を論破したことをいう。玄慧曰く「教外別伝の禅とは如何」、大燈こたえて曰く「八角の磨盤空裏に走る」、やがて僧が一つの箱をささげてくる。大燈曰く「これなにものぞ」、僧いう「乾坤の箱」、大燈竹篦をもって箱を打ち、「乾坤打破のとき如何」、僧黙して退く。玄慧はこれで敗北をみとめた。

臨済禅は、同じ仏国の門下から出て夢窓は五山文学の祖となり、大燈は公案禅の祖となって袂を分かった。大燈は病いを得て臨終がせまった時、禅僧であるからには、結跏趺坐の姿勢で死にたいと言い、弟子がとめるのもきかず、すわりなおして結跏しようとしたが、病んだ足はなかなかいうことをきかない、大燈は、無理に、血のほとばしり出る足を組み終えて寂した。今日、大徳寺に伝わる「血染めの法衣」はその時のものだといわれる。

仏祖を截断し、
吹毛常に磨く。
機輪転ずる処、
虚空、牙を咬む。

辞世の偈であるが、筆を投げつけて入寂している。

「思わざりき、日本にもかくの如き明眼の宗師ありしとは。いつか面会せんと思いしが、人に沮まれて果たさなかった。遺恨千万だ」

とは中国からきた南禅寺の僧大鑑清拙の感慨である。唐代の禅が、大燈によって日本に誕生していたことを清拙はみとめたのだ。大燈に二人の弟子がいた。大徳寺二世となった徹翁義亨、妙心寺開山となった関山である。関山は信濃国下高井郡中野の城主高梨美濃守高家の子で、建治三年(一二七七)正月七日に生まれ、七歳の時、伯父月谷宗忠の弟子となり、学業にはげんだが、十一歳の時、大応が鎌倉に来たので月谷にともなわれて会った。大応の風格があまりに尊くみえたので、出家の情やみがたく剃髪得度したという。大応は、

「彼今塵俗に渾処して塵境を観ること恰も糞土を見るが如し。因って宜しく慧眼と号すべし」

といって、慧眼という名をさずけた。のち、建長寺の一渓庵にこもって、五十一歳のとき、大覚禅師の五十回忌が営まれたが、席上、一僧に「方今天下叢林の中で明眼活手段の宗匠は誰か」とたずねたところ、「京洛紫野の大燈国師は悪辣の手段を具し、明眼の宗匠である」とこたえた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo